
アニマル・マスター2

相川 凛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニマル・マスター2

【Nコード】

N1803V

【作者名】

相川 凜

【あらすじ】

アニマル・マスター第一章<http://ncode.syosetu.com/n0140h/>の続編になります。

君の名は……

「おはよー、リリース」

「おはよー」

桶の泥をホースで洗い流しながら、通り過ぎる時に声をかけてくれた生徒に挨拶を返す。

私の声からも、相手（たぶんジュリアーノだと思う）の声からも、これでもかかっていうぐらいに怠さが滲み出ている。

それもそのはず。

現在の時刻、早朝五時。八月最後の日ともなれば、まだ日も昇っていない。

眠すぎる……。

きれいに泥を洗い流した桶に水を張っていると、また声がかかる。

「おはよお……」

眠そうな響きの中に、同情の色が混じった声が……。

顔を上げれば、思いつきり気の毒そうな顔をしたグルドと目が合った。

「おはよ、グルド。ちょっと、代わってみない？」

「ご、ごめん！ 僕、他の仕事あるから！」

少しからかってみただけなのに、全力で逃げられてしまった。

私は今、動物学の生徒たちの同情を一心に集めている。

その原因と、これから対決しなければならいんだから、眠いなんて言ってもらえない。

水がたっぷり入って重い桶を持ち上げると、多少よろめきながら獣舎の一つへと向かう。

天井が並外れて高く、他のどの獣舎よりも広いその場所に、ヤツはいる。

獣舎へと一步足を踏み入れると、興味津々といった様子で私の方を見る飛行竜たち。その中で、一匹だけ顔を出さない飛行竜が。寝ているのかいないのか、一番奥の檻の中で丸くなって動かない黒い塊。

私は檻の前でひとまず桶を下ろして、様子を窺ってみた。不気味なぐらい静かだ。

実習着のポケットにぶら下げていた鍵の束を手に取り、番号の記された鍵を鍵穴に差し込む。

カチャリという音が獣舎に響く。

今日は、まだ大丈夫らしい……。

そつと扉を押し開く。

ピクリと黒い塊が動いた！

私は床に置いたままになっていた桶を檻の中へと蹴りいれて、一気に扉を閉めた。

私が扉を閉めたのと、黒い塊の尾が扉を叩いたのはほぼ同時だった。

振動と轟音が獣舎の中を駆け巡る。

危なかったあ……。

ヤツが私を睨みつけた。人間だったら舌打ちしているところだろう。

「ピーチのくせに！」

私も苛立ちまぎれに吐き捨ててやった。

ヤツ（ピーチ）は、それはもうご立腹で、吼えまくった。アール先生がつけた「ピーチ」という名が大嫌いなのだ。

私が皆に同情されている理由、それは紛れもなくこいつだった。

新入りの飛行竜ピーチ（オス、推定二十歳ぐらい）

新入りといっても、ピーチがクレスメント学園に来たのは、私たちが入学するよりもひと月早い三月だ。

飛行竜は気難しくプライドも高いので、飼いならすのには時間と

手間がかかる。

ここに来てからまだ半年のピーチが慣れていないのは仕方がないことだったけれど、ここまで凶暴な飛行竜も珍しいそうだ。

彼らはとても知能が高く、自分の置かれている状況をすぐに把握する。

だから、心を開いてくれることはなくても、すぐに環境には適応するし、用もなく人間を傷つけるような真似はあまりしない。人間に反抗しても無駄だとすぐに悟るからだ。

それよりも、人間をつまく利用して脱走を試みたりする。飛行竜の飼育を解説した本にも、彼らを信用しすぎてはならないと記されているほどだ。

でもピーチには飛行竜を飼育するためのマニュアルは何一つ通用しなかった。

この半年の間にヤツに殺されかけた飼育員は十名にも上り、私たち動物学一年の中にも被害者が多数いる。ピーチは騎獣の世話に携わる人たちから「化け物」と呼ばれていた。

その「化け物」の世話を私が一人で担当することになったんだから、たまらない。

アール先生曰く、「アニマルマスターになるための特別授業の一環らしいけど、どう考えても面倒ごとを押し付けられたようにしか思えない。

医学部の方から「重傷者が続出して、治療にあたる生徒たちの疲労が激しい」って苦情がアール先生にいつていたって話も聞くし…

…。私は鼻息も荒く唸り声をあげる。ピーチを前に、今日はどうやってご飯を檻の中に入れようかと思案した。

調子に乗って怒らせすぎたからなあ。ピーチって呼ぶんじゃないかな…。

「ピーチをですか!？」

私の悲鳴に、校庭に集まっていた生徒たちも騒めいた。

だって、ありえない!

そう思ったのは、私だけじゃなかったようで、

「ええ、リリスさんのパートナーとして今日の授業に参加させようと思うんです」

笑顔で宣告するアール先生に、みんなが口々に反論してくれた。

「でも、あのピーチが大人しく人を乗せるわけないでしょう」

「それは、いくらリリスでも無理ですよ。振り落とされるに決まっている」

一名を除いては……。

「いいんじゃない? いけるよ、きっと」

私はすかさずミケーレを睨みつけたけど、彼はおどけて肩をすくめるだけだ。

「だったら、ミケーレがピーチに乗ってよ」

「えー、ヤダ。だって俺はアニマルマスターになりたいわけじゃないし。飛行竜のなだめ方なんてわかんないよ」

こんなヤツ進級試験に落ちればいいんだ、と意地悪なことを考えた時、アール先生が能天気な声で話しかけてきた。

「大丈夫ですよ、リリスさん。最近の鞍は安全性能が格段によくなっていますし、緊急停止装置までついているんですから」

「その緊急停止装置って、ほんつとうに大丈夫なんですか?」

先生のあまりにも軽い態度にかなり苛つきながら念を押すと、

「もちろんです。手元にボタンがついていまして、それを押すと弱い電流が流れるようになっていっていますよ。ちょうど飛行竜の急所と言われている首の後ろ 首の下の方で、付け根の辺りですね。

そこを刺激するようになっていっていますが、その場所というのが、幼体の頃に親が……」

鞍の説明をしていたはずなのに、いつの間にか飛行竜についての講義を始めてしまった。

延々と続くアール先生の講義に、皆の視線が冷たい……。さつきまで、あんなに同情してくれていたのに！

そこに救いの手が……。

「わかりました、先生。講義はそこまでにしていただけますか？
授業の時間が無くなってしまうです」

ジャンが無を言わさぬ調子でアール先生の講義を遮ってくれた。
「ああ、そうでした！ まあ、そういうわけで大丈夫ですから、ピーチをお願いしますね。ピーチもあんな性格なので、ここに来てから一度も獣舎の外に出ていないんですよ。ね？ ちょっと、気の毒でしょう」

そんな事言われたら断れないよ、先生。

確かにピーチは誰も手がつけられないので、ずっと獣舎の中にいる。

他の飛行竜たちは、ストレスが溜まらないように一日のほとんどを獣舎の外ですごしているのに。

まあ、放し飼いと言っても学園の周囲には結界が張られているから、学園の外に出ることはできないんだけど、それでもけっこう上空までいけるらしいし、学園の敷地もかなり広い。

一日中獣舎の檻の中にいるピーチと比べたら格段に快適だと思う。

「わかりました。パートナーは、ピーチでいいです……」

先生お得意の「情に訴える作戦」に勝てるはずもない。私のパートナーは、ピーチに決定してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1803v/>

アニマル・マスター2

2011年9月25日03時18分発行